

## 1 歴史と人間心理

ディケンズは『二都物語』(*A Tale of Two Cities*, 1859)でブルボン王制崩壊という歴史的变化が起きた前後の人間心理を描き、自分の視点で捉えたフランス革命の真実を呈示しようとしている。『バーナビー・ラッジ』(*Barnaby Rudge*, 1841. 以下『ラッジ』と略記)においても、彼はウィレット(John Willet)がゴードン暴動(1780)に遭い、心理的に過去に回歸する様子を描いて、暴動による衝撃の大きさを表現した。<sup>1</sup> この場合はウィレットの頑固さや愚鈍さという個人的性質の影響が退行の原因として大きいのに対し、『二都物語』ではある心理状態に陥る原因と歴史的な背景とがより明確に関連付けられる。例えば、医師マネット(Alexandre Manette)が記憶喪失を伴う神経衰弱から廃人同然の状況に陥ったのは、貴族のサン・テヴレモンド(St Evrémonde)兄弟による暴行事件に関与させられたこと、そして、それを告発しようとして18年間投獄されたことによる。すなわち、革命の一因となった領主権と封印状の濫用による悪影響を受けた結果、マネットは異常な心理状態に陥ったのである。

ディケンズが表現するのは、<sup>アンシャン・レジーム</sup>旧制度やその後に勃発する革命の個人に対する影響だけではない。彼は歴史の進展が生み出した狂信的な現象 共和主義者が繰り広げる <sup>カルマニョール</sup>革命輪舞に象徴されるバフチン的なカーニヴァル も描いている。それは『ラッジ』における暴動と同様に虐げられた民衆のエネルギーの噴出であって、国王の年代記という公式の歴史を停止させる。しかし、ゴードン暴動が一時的な秩序崩壊で、発生から一週間後

には既成の秩序が復活するのに対し、共和主義者のカーニヴァルはいつ果てるとも知れない。そればかりか、革命勃発が招いたカーニヴァルは「裏返しの生」もしくは「あべこべの世界」(『ドストエフスキ論』181)であるはずなのに、国王に代わって公式の歴史を展開させようとするのだ。

共和主義者の政治は、回転砥石を用いて「革命の敵」を虐殺する場面をはじめ恐怖感と抑圧感に満ち、無辜の犠牲者を生んでいる。そんな犠牲者の一人であるお針子に、ディケンズは革命の本来もたらすべき状況 貧民が「ひもじさに泣くことはなく、万事につけて苦しみが減る」(388)<sup>2</sup> 状況を指摘させ、彼らの政治に対する反意を示している。要するに、ディケンズは民衆による武装蜂起によって恐怖政治以外の何ももたらされなかったと主張しているのだ。このことにより、彼はフランス革命に関する認識不足を多くの批評家によって指摘されることになる。例えば、彼はJ・S・ミルやマルクスが着目した社会的な発展の過程に全く注意を払っておらず(Baumgarten 166)<sup>3</sup> 領主権と封印状の濫用以外には、革命の要因を飢えや困窮の問題に限定している。これは彼がカーライルの『フランス革命』(*The French Revolution*, 1837)を全面的に信頼し、資料として利用したためだと考えられる。<sup>4</sup>

しかし、だからと言ってディケンズが歴史的な真実を描いていないわけではない。歴史家が歴史上の事件の原因と結果を事実に基づいて合理的に解釈するのに対し、歴史小説家は資料に基づいてある特定の歴史空間における個人の感情を想像し、物語に描き出すからである。ディケンズは『二都物語』に、未曾有の歴史的変化に直面した場合の異常な人間心理を真実として描き込んでいる。マネットの神経障害はそんな人間心理の一つである。マダム・ドファルジュ(Thérèse Defarge)の怨恨の強さについても、ディケンズは、貴族に辱めを受けた人物と自分の関係を彼女に挙げさせ、「報いを求めるのは私の持って生まれた

義務」(354)と言わせることによって、旧制度下での過酷な子供時代を読者に思い描かせる。<sup>5</sup> とはいえ、このような個人の心理よりも、人々が集団として経験した特殊な心理状態や、その心理状態が他者に及ぼす影響や他者が示す反応に、ディケンズはより興味を示している。集団の陥った狂信性こそが、フランス革命によって生じた国王のいない未知の歴史空間がいかに特異なものであったかを如実に示す。その狂信性の表れが共和主義者の繰り広げるカーニヴァルなのである。

ただし、ディケンズが中立的な立場から人々の心理を考察したとは必ずしも言えない。フランス革命に対する作者の意識的あるいは無意識的な是非の判断が否応なく表出していると考えられるからだ。その際、この種の判断を下すことと集団心理を描くことが必ずしも調和しているとは言えない。このことがディケンズの集団に対する<sup>アンビヴァレンス</sup>両価感情、すなわち、集団を肯定している時もあれば否定している時もある原因ではないだろうか。また、『二都物語』が描かれた1850年代において革命はまだ生々しい記憶として残存していたので、それに冷静な判断を下すことは容易でなかったのも事実であろう。<sup>6</sup> このことは『二都物語』について指摘されるディケンズの革命描写の欠陥の一因である。同時に、それが集団に対する彼の両価感情に影響していることも間違いない。

## 2 第三部「嵐の跡」に描かれたカーニヴァルの特異性

『二都物語』における革命描写にはカーニヴァルの典型的な事象が見られる。例えば、男性は「レースや絹やリボンなど略奪してきた婦人用品を、まるで悪魔のように飾り立てて」(272) 女装をしているが、見かけ上の性差の消滅はカーニヴァルの最も中心的な儀式である去勢を表している。ただし、第三部「嵐の跡」(The Track of a Storm) における革命

輪舞の場面と、第二部「黄金の糸」(The Golden Thread)におけるバスチーユ監獄襲撃や財務長官フーロン(Foulon de Doué)処刑の場面との間には、大きな差異がある。第二部では『ラッジ』の暴動の場面と同様に、踊り続ける人々は祝祭の伝統を受け継ぎ、抑圧された生命力を狂気じみた行為の中で発散させ、すべての関係を破棄して、現存する社会システムから解放されようとする。しかし、革命輪舞では、典型的なカーニヴァルの様相が見られても、人々が打破すべき体制は既に崩壊している。

アラン・フォールによれば、共和国政府は「革命の敵」が暦上のカーニヴァルを自分たちの都合のよいように利用するのではないかと恐れ、カーニヴァルを封じ込めようとした(Faure 138)。いつの時代もカーニヴァルは体制を転覆させる可能性を保持していたのだ。しかし、政府が祝祭としてのカーニヴァルを封じ込める一方で、カーニヴァル的な行為は日常化していた。バフチンによれば、去勢の次に中心的なカーニヴァルの儀式は王の「おどけた戴冠とそれに続く略奪」(『ドストエフスキイ論』183)だが、この儀式はフランス革命においてルイ16世の辿った運命に合致する(Lodge 110)。共和主義者はお祭り騒ぎをしながら王の処刑を見物し、血の付着した王の衣服や頭髪を奪い合ったという。このような騒ぎは処刑の度ごとに繰り広げられたに違いない。革命空間では人を死へと至らしめる処刑と生命力を発散させる祝祭行為とが可逆的だったのである。

ディケンズが第三部で描いているのは、このように日常化した特異なカーニヴァルである。しかも、熱狂的に踊る人々の中に「復讐」(Vengeance)と呼ばれる非情な女を描き込むことによって、革命空間における公式性と非公式性の可逆性を強調している。「復讐」は共和国政府から見れば協力的な良き市民であって体制側に限りなく近い。彼女と通じるジャック三号は陪審員である。そう考えれば、革命輪舞に興ずる市民には共和国の権威と公式性があることになる。そのため、そこから逸脱するものは排除されてギロチンにかけられ

る。マネットの娘ルーシー（Lucie）が目立たない生活を心がけるのはそのためだ。また、封印状を彷彿させる「いつでも無辜の善人を悪人の手に引渡すことができるようにした容疑者法」が制定され、牢獄は「罪を犯した覚えはないのに、審理一つ受けずにぶちこまれた囚人」（283）で溢れ返る。「復讐」たちは法の手先として、この状況に貢献している。従って、カーニヴァル的な事象が随所に見られても、革命政権下の社会には、皮肉なことに旧制度下と同様の抑圧感が漂うのである。

ディケンズは人々が集団的な行為に耽溺するようになる背景を「集団心理の感染」（292）として説明している。もっとも、それは「復讐」たちが革命輪舞に興ずる背景を直接的に述べたものではない。ディケンズは、獄中の旧貴族が音楽会の準備にいそしむのを「時節の状況から生じる心情」によると解説し、革命空間では特有の心理が作用することを示唆する。そして、死刑を目前にした囚人が抱く感覚について以下のように述べている。

Similarly, though with a subtle difference, a species of fervour or intoxication, known, without doubt, to have led some persons to brave the guillotine unnecessarily, and to die by it, was not mere boastfulness, but a wild infection of the wildly shaken public mind. In seasons of pestilence, some of us will have a secret attraction to the disease a terrible passing inclination to die of it. And all of us have like wonders hidden in our breasts, only needing circumstances to evoke them. (292)

ここでディケンズは、革命空間に限らず特殊な状況においても、誰もが個人的な判断を下すことよりも集団的な行為に身を任せる傾向にあることを示している。踊りに熱狂するのもそのような行為の一つに過ぎないのである。引用文中の「胸の奥に隠された衝動」は、

第一部第三章冒頭の「自分だけの秘密」(15)を指す。この部分でディケンズは人々が各々の秘密を親しい者にも隠して共同体の中で生活していることを「驚嘆に値する」(14)と述べている。この一節に着目したボールドリッジは、ディケンズが19世紀的な個人主義に反発し、革命同志や彼らの「友愛」の叫びに共感していると指摘する。そして、ロリー氏(Jarvis Lorry)のテルソン銀行への忠誠心と革命における共同体の精神、さらには主人公カートン(Sidney Carton)の死の決意に共通性を見出している。革命の精神とカートンの決意が共通する証拠は、サン・テヴレモンド家の嫡子ダーネイ(Charles Darnay)が死刑を宣告される日の明け方に、セーヌ川に浮かぶ渦の海まで運ばれる様子を想像したカートンの「俺のようだ」(327)という言葉である。海は革命同志を含む暴徒を表すのに使用された比喻であって、彼は自分が同志と一体化しつつあるような思いに囚われていると考えられる(Baldridge 637, 640-41, 647, 649)。しかしながら、それらに共通性があると果たして断言できるのだろうか。

確かに、例えば『大いなる遺産』(*Great Expectations*, 1860-61)でディケンズは個人主義に反発している。階級の枠組を越えて紳士になることを夢見たピップ(Pip)は、自分が生れ落ちた集団に戻ることを最終的に決心する。その第一歩として彼は労働者階級のビディー(Biddy)と結婚しようとするが、彼女は既にジョー(Joe Gargery)と結ばれていた。集団に帰属することよりも個人的な野望を優先したことによってピップは罰せられたのである。しかし、少なくとも『二都物語』のカートンの死について言えば、ディケンズは彼を集団から逸脱させ、反対派をギロチン台に送ったロベスピエールが象徴する恐怖政治の思考形態に対する不安から批判を示しているように思われる。換言すれば、ディケンズはカートンの個人性を描くことによって、共和主義者の集団性に異議を唱えているように思われるのだ。そのことを次節で検証したい。

### 3 カートンによる集団性の否定

愛する女のためのカートンの死には、「集団心理の感染」の影響というよりも、個人的な陶酔が見られる。自分と瓜二つのダーネイと独房内で入れ替わった時、カートンは相手に遺書を口述筆記させる（365-66）が、ダーネイとして「私」と言いながら、実際には自分自身からルーシーへの伝言を口述している。彼の言う「私たちが話した時の言葉」とは彼女に愛を仄めかした言葉（156）に他ならない。女への愛をそれと分からぬように彼女の夫に対して告げることは自己陶酔である。しかも、カートンは自分の情熱が彼女に伝わり、その記憶に残ることを知っている。奇しくも彼は愛を仄めかした時に「父親と瓜二つの小さな顔があなたを見上げたら」あなたのために命を犠牲にした男を思い出して欲しいと、彼女に頼んでいた（159）からである。

ディケンズはカートンの死に自己満足以上の意味合いも与えている。彼に「死」を選ばせることによって、恐怖政治における革命の精神に異議を唱えているのである。この場合の「死」とは革命集団が問う「友愛か死か」という二者択一における「死」を指す。「友愛」は革命の標語「自由、平等、友愛」におけるそれであるが、マルセル・ダヴィッドによれば、「友愛」の定義は1789年以降の10年間に变化した。革命初期において「友愛」はすべてフランス人の団結を呼びかける表現であった（David 57）。『二都物語』で言えば、バスチーユ監獄襲撃後のサン・タントワヌ（Saint Antoine）を描写するのに用いられる形容詞形（fraternal, 230）は、この意味での「友愛」の定義を踏襲している。しかし、恐怖政治期に「友愛」は「兄弟か敵か」を定める狭い意味で用いられた。1793年のある集会における「人民にとって中立の存在はありえない。兄弟か敵かが存在するだけである」という宣言

を引用し、ダヴィッドは「友愛か死か」という表現が「兄弟か敵か」を峻別しようとする感情を捉えていると指摘している (David 145)。

ディケンズは「友愛」の定義を小説中で検証していない。しかし、革命の行き過ぎを表現する際に「友愛か死か」という言葉を用いている。彼がこの言葉を使っているのは恐怖政治下のパリを描写する部分においてだが、それは後に「しからずんば死」を付け加えた「友愛か死か」という二者択一を迫る句の中のみである。しかも、同じ箇所では、ダーネイが革命集団から「敵」と見なされて断頭台へと追い立てられていく様子を描いている。そうすることで、恐怖政治の思考形態が「敵」を死滅させるために存在したことと、「友愛」の定義が革命空間で歪曲させられていることを示唆しているのである。

「自由」の意味が革命空間で歪められていることは明示されている。牢番は「自由のためだから」と自らに言い聞かせながら現状への不満を抑えているが、彼がそう言い聞かせるのは、自分も「兄弟か敵か」を見極める眼差しに絶えず曝されており、投獄されて断頭台に送られる可能性があることを知っているからだ。語り手による「自由という言葉が、この場所で聞くと妙にそぐわないものに響いた」(265)というコメントを通して、ディケンズは牢番の自由が革命によって実際には奪われていることを皮肉っている。

「敵」と見なされた無実の民衆の一人としてお針子がいる。ラ・フォルス牢獄でダーネイと一緒にいた彼女は、カートンをダーネイだと思って死刑囚護送馬車タングンフシクルの中で手を握らせて欲しいと頼む。彼女は彼がダーネイではないことに一目で気付くが、身代わりとして死ぬカートンの勇気を称え、彼に感銘の涙を流させる (368-69)。彼女はカートンにとって死に赴く自分に深い愛情を抱いてくれるはずのルーシーの身代わりとなっている。つまり、お針子と彼は断頭台という祭壇の上で比喩的に結婚するのだと解釈できるだろう。なぜなら、カートンは「友愛か死か」の「死」を選び、しかも革命本来の目的に対する無意識的

なアイロニーの提示者であるお針子と結ばれることによって、「友愛」という言葉の偽善性を暴くだけではなく、歪められた革命の精神を正す役割を託されているからである。この結婚を通してカートンがカーニバルにおける男性王として戴冠されたと見なすこともできよう。祝祭としてのカーニバルは通常、男性王の戴冠、すなわち去勢された男性原理の復権によって終結し、四旬節を経て復活祭へと続く。カートンは「死」という大斎節の後に自分がルーシーの息子として復活すると信じている。これは、彼女に抱かれる自分と同じ名前の幼児を彼が思い浮かべているのに加え、断頭台上りながら「主のたまいけるは、我は復生なり」(John 11: 25) というキリストの復活に関する聖書の一節を想起すること(389)に表れている。お針子との結婚を伴う無辜の犠牲者としてのカートンの処刑は、革命というカーニバルの大団円にふさわしいものになるはずだった。それにも関わらず、この結末がメロドラマ的すぎるという批判を受ける要因の一つは、<sup>7</sup> 第三部で展開されるのが祝祭ではなく日常化したカーニバルであるためだろう。日常化したカーニバルの終わりが見えない。革命の行方も見えない。これは小説結末部の1793年においてだけでなく、ディケンズが『二都物語』を執筆した1850年代においてもそうだった。革命の象徴と称えられるヴィクトル・ユゴーでさえ、少なくとも1849年まで「ほかの多くの誠実な人々同様、93年に対する恐怖を常に心に抱きつづけてきた」(稲垣 112)と自分自身で告白している。従って、カートンが「死」を通して革命というカーニバルの終結を表象しても現実味が感じられない。読者には彼の死の感傷的な印象が残るだけである。

#### 4 時代の行方とディケンズの集団に対する両価感情

バフチンによれば、祝祭としてのカーニバルは終結後に萌芽すべき種を孕み、新時代

到来が示唆される（『ラブレター』25-26）。この指摘の傍証であるかのように、『ラッジ』のジョー（Joe Willet）は暴動の渦中にあるのに「時代は変わった」（564）という新時代到来の宣言をする。彼はアメリカ独立戦争で負傷した後に、彼と共に暴動鎮圧に貢献するエドワード（Edward Chester）は西インド諸島で一旗揚げた後に、それぞれ帰国している。二人は来るべき19世紀における帝国主義国家としてのイギリスのあり方を予感させる文脈で活躍した。つまり、次世紀に萌芽すべき種を象徴する人物たちだと言える。<sup>8</sup>

一方、『二都物語』ではカートンがカーニヴァルの終わりを表象しても、新時代到来は現実のものとして予感されない。本来なら、時代を察知する知性を持つダーネイが先導役になるはずだった。その証拠の一つ目として、彼はジョージ・ワシントンの方がジョージ三世よりも後世に名を残すという知見を示した（75）。二つ目として、彼は実家に対する嫌悪感もあって旧制度の弊害を見て取り、封建領主としての将来に見切りを付けて渡英した。二つ目の証拠から、彼と『ラッジ』のエドワードとの類似性は瞭然として明らかだ。エドワードは、息子の結婚を通して経済的な安定を獲得しようとする父と、その父が吹聴するイギリス社会のあり方に失望し、貴族の身分を捨てて故国を離れたからである。しかし、エドワードが暴動鎮圧に一役買うのとは対照的に、ダーネイは故国の秩序回復に貢献できない。獄中の貴族が彼の目に亡霊として映った（265）のと同様に、彼も旧制度の形骸に過ぎない。それは、マネットの手記が朗読されると、彼が旧貴族としての自身の罪を認めてしまい、それ以降はカートンと言葉を交わす場面を除くと完全に沈黙してしまうからである。<sup>9</sup>

旧制度によって不当に投獄されたマネットも新時代の先導役になることができない。恐怖政治下で彼は娘の家庭を守るため、バスチーユの囚人だったという立場を利用して奔走する。神経衰弱に陥っていた頃は逆転していたルーシーとの父娘関係も、この時は本来の

関係が回復していた。すなわち、男性が去勢されて女性が実権を握るカーニバル空間において、例外的にマネット家では父権が回復したのである。しかし、その状態は継続せず、かつて自分が書いた手記が朗読されると、彼は囚人時代へ精神的に回帰してしまい、小説中で正気を取り戻すことはない。彼はカーニバルで戴冠される無為の王にすぎなかったことを自ら暴露しているのである。

カーニバルが日常化したパリで男性原理を最後まで守り続けている者がいるとすれば、それはロリー氏であろう。彼が忠誠を誓う銀行のテルソン (Tellsen) という名は、それに仕える者が男性原理による支配を守り、次世代を担う息子 (son) にその精神すなわち歴史を伝える (tell) 役割を担うことを暗示している。カートンが「友愛か死か」の二者択一における「死」を選び、偽善的な「友愛」を否定するのも、ロリー氏のマネット家への献身や顧客の利益を守るために老身を顧みずパリへ渡る行動力に感化されてのことである。従って、ロリー氏がその志を伝えた息子はカートンだったと言えるのではないか。カートンの復活がカーニバルの終結を表象するには現実味が乏しいとはいえ、ロリー氏は次代に萌芽すべき種を育んだのである。そして、帰国後の彼がマネット親子のための尽力を続けながら (389-90)、今度はカートンの名を持つ幼児に新時代における萌芽すべき種を託すのだと言っても、決して牽強附会にはなるまい。

テルソンの行員はチーズと同様「テルソン独特の風味と青かび」が出るまで客の前に出られない (57) と述べるディケンズも、集団としてのテルソン銀行を没個性的だと非難はしていない。彼はテルソンが伝える男性原理に本来の友愛の精神を見出しているのだ。それでは、ディケンズが集団を完全に肯定しているかと言えば、そうではない。彼は革命輪舞に興ずる革命同志が集団として作り出す恐怖を認識し、同志を結束させる「友愛か死か」の精神に反発している。彼はカートンの中に集団に対する肯定的な気持ちと否定的な気持

ちの両方を書き込んでいるのだ。というのも、カートンはテルソンが伝える男性原理に感化されながら、革命集団の「友愛」を否定して個人的な「死」を選ぶからである。とはいえ、カートンが処刑された1793年以降も、「友愛か死か」の叫びが完全消滅するのに時間を要することは明らかだ。また、銃の暴発によるマダム・ドファルジュの死後もカートンの処刑が滞りなく行われたように、一個人の死と革命の弱体化とは無関係である。ディケンズは「集団心理の感染」力に対して個人が無力であることを普遍的な事大主義として『二都物語』の中に描き込んでいるのだ。これは、60年前の歴史的な出来事を覚えていた人々と同様に、ディケンズがフランス革命の衝撃という「集団心理の感染」を受けていたためではないだろうか。

#### 注

1. 詳しくは矢次「変化と不変」(6)を参照。
2. 『二都物語』からの引用は、下の引用文献に挙げるペンギン版からである。
3. ディケンズもカーライルもフランス革命を飢えと復讐の単純な爆発として示す傾向がある。ディケンズがフランス革命から知的かつ政治的な要素を取り去り、恐怖感を描くことだけに終始していると、スペンスは非難している (Spence 24)。
4. ディケンズはブルワー=リットン (Edward Bulwer-Lytton)宛ての書簡で『パリの情景』 (*Tableau de Paris*, 1802) やルソーも参照したと述べているが (*Letters* 9: 259) 資料として序文で言及しているのは『フランス革命』のみである。それについて、ディケンズはカーライルに謝辞を述べている (*Letters* 9: 41)。
5. ディケンズには、ある行状に至る原因を子供時代の辛い経験に見出す傾向がある。例えば『デイヴィッド・コパフィールド』 (*David Copperfield*, 1849-50) のヒープ (Uriah Heep)

に、悪事の釈明をさせる際に子供時代についても語らせ（39章）、子供時代がその後の人生に及ぼす影響を示唆している。

6. 『二都物語』執筆当時、ディケンズや他の著名人はフランス革命と同規模の混乱がイギリスで発生すると信じていた（Gorniak 26）。
7. 例えば、ジョンソンは「小説が最終的に到達する熱烈なメロドラマは革命の社会に対する厳罰を残酷かつ獰猛な獣性に変換してしまう」（Johnson 982）と述べている。
8. 詳しくは矢次「他者の歴史」（10-11）を参照。
9. ディルノットはダーネイとエドワード、そしてサン・テヴレモンド侯爵とエドワードの父の関連を指摘している（Dilnot 20）。ディケンズ自身、ブルワー=リットン宛ての書簡で、侯爵とダーネイについて「貴族が古く残酷な考えと結託し、過ぎ行く時代を象徴する一方で、その甥が来るべき時代を象徴する」（*Letters* 9: 259）と述べている。しかし、本稿で述べた理由により、ダーネイには新しい時代を象徴するのに不適格な側面がある。

## 引用文献

Baldrige, Cates. Alternative to Bourgeois Individualism in *A Tale of Two Cities*. *Studies in English Literature* 30 (1990): 633-54.

Baumgarten, Murry. Writing the Revolution. *Dickens Studies Annual* 12 (1983): 166.

David, Marcel. *Fraternité et Révolution Française 1789-1799*. Paris: Aubier, 1987.

Dickens, Charles. *Barnaby Rudge*. 1841; Harmondsworth: Penguin, 2003.

---. *David Copperfield*. 1849-50; Harmondsworth: Penguin, 1985.

---. *Great Expectations*. 1860-61; Harmondsworth: Penguin, 1985.

---. *A Tale of Two Cities*. 1859; Harmondsworth: Penguin, 2003.

Dilnot, Alan. *Barnaby Rudge: The Historical Novel and Lies*. *The Dickens Magazine*. 3.4 (2005): 18-20.

Gorniak, George. The English Revolution. *The Dickens Magazine*. 3.4 (2005): 26-28.

Johnson, Edgar. *Charles Dickens: His Tragedy and Triumph*. 2 vols. Boston: Little, Brown & Co. 1952.

Lodge, David. *After Bakhtin: Essays on Fiction and Criticism*. London: Routledge, 1990.

Spence, Gordon. Dickens as a Historical Novelist. *The Dickensian* 72 (1976): 21-29.

Storey, Graham, ed. *The Letters of Charles Dickens*. Vol.9. Oxford: Clarendon, 1997.

稲垣直樹 『「レ・ミゼラブル」を読みなおす』 白水社、1998年。

バフチン、M. 『ドストエフスキイ論 創作方法の諸問題』 新谷敬三郎訳、冬樹社、1974年。

バフチン、ミハイール 『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネサンスの民衆文化』 河上香男里訳、せりか書房、1990年。

フォール、アラン 『パリのカーニヴァル』 見富尚人訳、平凡社、1991年。

矢次綾 「ディケンズが描いた他者の歴史 『バーナビー・ラッジ』」 『九州英文学研究』 23 (2006): 1-12。

---. 「『バーナビー・ラッジ』における変化と不変 歴史小説家としてのディケンズ」 『ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報』 28 (2005): 3-14。

『中部英文学』 第26号掲載論文